

昼は冷酷課長、夜は絶倫セラピスト

——処女の私が快楽に堕ちるまで

夜果堂書房／高瀬ザクロ

## 第一話

大学の同窓会に、久しぶりに足を運んでみた。

会場のホテルの宴会場はシャンデリアの光を浴びて華やぎ、明るい笑い声が絶え間なく響いている。

数年ぶりに顔を合わせた同級生たちはドレスや華やかなワンピースに身を包み、久々の再会を心から楽しんでいるようだった。

「夏休みに子ども連れてハワイ行くんだ」

「うちは旦那が昇進して、来月からシンガポール駐在よ」

会話の中心は、自分の近況よりも旦那や子どもたちの話題。

奈緒はグラスを片手に笑顔を返しながらも、どこか遠い世界を見て

いるような気分だった。

小学校から大学まで女子校育ち。

ろくな恋愛経験もないまま二十代を迎え、社会人になってからは、仕事に追われるばかり。

気がつけば「彼氏いない歴〓年齢」のまま今日まで来てしまった。だからこそ久しぶりに会う同級生たちの“妻として、母として”の充実した表情はまぶしすぎた。

輪の中にいても自分だけが違う世界に立たされているような居心地の悪さが胸に広がっていく。

「……ごめん、ちよっとお手洗いに」

笑顔のままそう言って席を立ち、化粧室の鏡を覗く。

整えた髪、控えめなメイク、きちんとしたスーツ姿。

決して見劣りはしないはずなのに、同窓生たちが当然のように語る

“幸福”の輪にはどうしても入り込めなかった。

二次会の誘いを断り夜の繁華街へ出ると、ネオンの光がまぶしくて胸が締めつけられる。

歩道を行き交う人々の笑い声。

腕を組んで歩くカップルの姿。

（……明日も仕事だ。契約手順、間違えたらどうしよう。課長に

怒鳴られるの、もうやだな……）

脳裏に浮かぶのは、営業部の課長——正村岳の顔。

三十代半ば、縁なしの眼鏡越しに鋭く光る視線。

誰もが認める仕事のできる上司だが、その言葉はいつも冷たく、突き放すようだ。

特に奈緒には容赦がなく、書類の誤字脱字ひとつでも眉をひそめて「何度言えばわかるんだ」と吐き捨てる。

（……自分がポンコツだから仕方ないけど、ほんと苦手だな）  
いつも不機嫌そうに見える顔。

眼鏡の奥の目は怒っているようで、近寄りがたい。

思い出しただけで胃がきりきりと痛み出す。

足取りが重くなったとき、ふとビルの広告が目に残った。

——「女性専用リラクゼーション・セラピー」。

「恋人のように優しく」「疲れた貴女を癒やします」

そんなコピーが、夜のネオンよりも鮮やかに胸へ突き刺さった。

奈緒はしばらく立ち尽くす。

(……なにこれ、怪しい……こういうのって危ないんじゃない？)

スマホを取り出し、ためらいながらも検索をかけてみる。

公式サイトは思ったよりも整っていて、セラピストごとの口コミやランキングが並んでいた。

(……顔写真も出てない。やっぱり、怪しいよ……)

そう思いかけたとき、目に入ったのは利用者のレビュー。

「安心して任せられる」「まるで彼氏みたいだった」「久しぶりに女性として扱われた」

スクロールしてもしても、絶賛の声ばかり。

画面を握る指先が小さく震える。

（……でも、こんなの、私には関係ない……）

一度はスマホを閉じかける。

だが、同窓会での光景が脳裏をよぎる。

幸せを語る友人たち。輪に入れなかった自分。

「旦那」「子ども」「昇進」……自分には何一つない。

（……置いてかれたみたいだったな。私だけ、空っぽで……）

胸の奥がずきりと痛む。

今夜の孤独は、ただ眠れば消えるだろうか。

いや、きつと眠れない。

誰でもいい——ただ、人の温もりに触れてみたい。

そう思ってしまった瞬間、指先が勝手に動いていた。

予約フォームに名前を打ち込み、送信ボタンを押す。

小さな電子音が響き、予約確定の文字が浮かぶ。

(……予約しちゃった……)

奈緒はスマホを胸に抱え、深く息を吐いた。

怖さよりも、寂しさを埋めたい気持ちのほうが勝ってしまった。



指定されたホテルの一室。

奈緒はベッドに腰掛け、胸の鼓動を抑えながら時を待った。  
やがて控えめなノックの音が響く。

息を詰め、奈緒はゆっくりとドアスコープを覗いた。  
そこに立っていた男を見た瞬間、全身が凍りつく。

——正村岳。

会社で日々顔を合わせる、あの冷酷な課長。

その男が、目の前の廊下に立っていた。

震える指でスマホを掴み、受付に電話をかける。

「す、すみません……今、来ている方……正村って名前じゃない  
ですか？ 知り合いに本当にそっくりで……」

「お客様、ご安心ください。今お伺いしているのはそのような名前の者ではございません」

落ち着いた女性の声が返る。

奈緒は一度大きく息を吐いた。だがすぐに食い下がる。

「……あの、でも、やっぱり不安で。キャンセルできますか？」

「……可能ですが、規定によりキャンセル料はご利用料金の全額を頂戴いたします」

奈緒は奥歯を噛みしめた。

無駄になる金額と、ここまで来て逃げ出すことへの迷い。

やがて、力なくスマホを置き、ドアノブに手をかける。

奈緒の夜は、その瞬間から思いがけない深みに沈んでいった。

## 第二話

「こんばんは。ご指名ありがとうございます」

ドアを開けた先に立っていた男は柔らかな笑みを浮かべ落ち着いた声で挨拶をしてきた。

白地のラフなシャツに清潔感のあるチノパン。

その爽やかな姿に、奈緒の胸は強く揺れる。

正村課長にあまりにも似すぎている。

顔立ち、輪郭、背丈、全て重なって見えて、言葉が喉に貼りついたように出てこない。

「……っ」

「どうかしました？」

男が首を傾げる。

耳に落ちた声は驚くほど優しく、目つきも柔らかい。

鋭さと冷たさを宿した正村の眼差しとは正反対だった。

——あの課長が、こんな仕事をしているはずがない。

リラックスした雰囲気の中の人物は、やはり他人の空似にすぎない

——そう思えた。

奈緒はぎこちなく笑みを作り、首を振った。

「い、いえ……知り合いに似ていたので、びっくりして……」

男は小さく目を丸くし、興味深そうに問いかける。

「そんなに似ているんですか？」

奈緒は視線を逸らしながら答えた。

「はい……でも、喋ったら全然別人……」

男は安心したように微笑み、静かに首を傾げた。

「その方と会うと……嫌な気持ちになるんですか？」

奈緒は胸に引っかかっていたものを押し出すように口を開いた。

「そうですね……辛く当たられて……いつも苦しくなるんです」

男はゆっくりと頷き、優しい声音で応じた。

「そうなんです……あなたみたいに可愛い人をいじめるなんて。」

でも、その人はあなたが気になって仕方ないのかも？」

奈緒はぶんぶんと首を振り、強く否定した。

男はそんな様子を見て、にこやかに告げる。

「でも、今日は安心してください。ここにはあなたを傷つける人はいません。ゆっくり、甘えてくださいね」

柔らかな声とともに、温かな手が肩に触れる。

奈緒の緊張は少しずつ解けていき今夜だけは委ねてしまおうという  
思いが静かに胸に満ちていった。

けれど、案内されたベッドの前に立った瞬間、足がすくむ。

（……ほんとに、脱ぐの？ 知らない男の人の前で……）

そんな奈緒の逡巡を見て取ったのか、男はわざと窓の外へ視線を逸らした。背中を向け、まるで何も見ないと伝えるように静かに待ってくれている。

それでも指先は震えブラウスのボタンを外すのに時間がかかった。  
スカートを下ろすときには顔が熱く、胸が張り裂けそうになる。

一度は「やっぱ無理」と心の中で叫んだが――

同窓会で感じた孤独がよみがえる。

輪に入れなかった自分。

誰にも抱きしめてもらえない自分。

(……誰かに、触れてほしい。寂しいのはもういや……)

歯を食いしばり、最後のショーツまで指先で外していく。

脱ぎ捨てた瞬間、全身が熱に包まれ、心臓が痛いほど脈打った。

両腕で胸を隠すようにし、ゆっくりとシートンへ体を預ける。

「……準備、できました」

消え入りそうな声でそう告げ、裸のままうつ伏せになった。

そのとき、背後で小さくオイルを温める音がした。

温かな空気が背中を撫で、奈緒はもう後戻りできないと悟った。

「では、肩から始めますね。力加減は遠慮なく言ってください」

掌が首筋から肩へと広がる。

温められたオイルがずっと肌に馴染む。

なめらかで白い肌は光を受けるたび艶めき、まるで絹のように指先を受け入れていった。

凝り固まっていた筋肉をほぐすように、圧がじんわりとかかる。

緊張が溶けていくのがわかる。



「……あつ」

小さな声が漏れた。

首筋から肩、そして肩甲骨の内側を丁寧に押し流される。

まるで重荷が外れていくようだった。

奈緒はシートに頬を埋めたまま、こっそり男の横顔を窺った。

やはり、正村課長に似ている。

けれど、その手つきは柔らかく、眼差しも声も温かい。

——あの冷たい課長が、こんな優しい触れ方をするはずがない。

そう思うたびに、安心が入り混じった。

「ここ、少し張ってますね」

腰の上に手が移り骨盤まわりを親指でゆっくりと押しほぐされる。

腰のこわばりが緩むにつれて、吐息が自然とこぼれた。

やがてオイルに濡れた手が背骨を伝い、滑るように下へ。

ヒップの外側をなぞり、太腿の裏をゆつくりと押し流していく。

静かなりズムで繰り返される動きに、奈緒の身体は次第にシーツに沈んでいった。

その指先が内腿の柔らかな部分に触れたとき、奈緒の喉からか細い声が漏れた。

「……っ」

羞恥で脚を閉じたくなる。

けれど、その瞬間、低い声が耳に落ちる。

「大丈夫ですよ。恥ずかしがらないで」

掌が太腿の付け根を撫で、オイルが熱を伴って広がっていく。

奈緒は顔を横に向け、またそつと男を見た。

正村に似た横顔がそこにあった。

だが、あの人とは違う。

——この優しさは、絶対に正村にはない。

心を言い聞かせるように、奈緒はぎゅつとシーツを握りしめた。

「では、仰向けになりましたようか」

促され、奈緒は一瞬ためらった。

「……あの、恥ずかしい、です……」

男は微笑みを浮かべ、ベッドサイドのライトをひとつ落とした。

部屋は一段と柔らかな暗がりにも包まれる。

「これでどうですか。恥ずかしくないようにしましょう」

奈緒は頷き、そろそろと仰向けに身体を横たえた。

男の指先が首筋から鎖骨、そして胸元へとゆっくり広がっていく。ひやりとした感触がすぐにじんわりとした温もりへと変わった。

オイルの膜をまとった掌はなめらかに乳房の外縁を描き、円を描くように優しく揉みほぐしていく。

「……ん……」

胸の外側をほぐされるだけでも、不思議と奥の方に熱が集まり、奈緒の声は少しずつ震えていく。

掌が沈むたび柔らかな肉がぐにゅりと形を変え、また戻っていく。

その動きに合わせて胸全体が揺れ、オイルがきらめいた。

やがて男の指先が、乳首へと近づいていく。

軽く触れられた瞬間、奈緒の唇から甘い吐息がこぼれた。

「……ひっ……んっ」

指先で転がすように弄ばれ、乳首がじわじわと硬さを増していく。

その変化を確かめるように、男は口角を上げて囁いた。

「……ここも、しっかりほぐしてあげましょうね」

その声にかすかに首を振ろうとしたが、次の瞬間、乳首を親指と人差し指で挟まれ、くりくりと転がされる。

「んあ……っ！ あっ……だ、め……」

思わず絞り出された声は、高く震え、奈緒自身も驚くほどだった。

オイルで濡れた胸は掌に合わせてぐにゅぐにゅと自在に形を変え、乳首だけが際立つように硬く尖っていく。

くにゅ、くにゅ、と執拗に摘ままれるたび、熱の波が胸から腹へ、そして下半身へと伝わっていった。

「やつ……そんなふう……っ」

腿の奥に疼きが広がり、無意識に膝と膝をすり合わせてしまう。潤んだ瞳で見上げれば、男は楽しげに奈緒の反応を眺めていた。

「ふふ……ほぐれてくると、体って正直になりますね」

乳首をくりくりゆくりゆとひねられるたび奈緒は耐えきれず腰をよじり吐息を洩らした。

膝の間からは熱い疼きが抜けず、奈緒は恥ずかしさを忘れて身を

委ねてしまっていた。

掌はさらに下腹部へ。

へその周りを円を描くように撫で、やがて最も秘められた場所へ近づいていく。

奈緒は両手で顔を覆い、声を押し殺した。

「み……見ないでください……恥ずかしい……」

男はその手をそつと取り、耳元に吐息を落とす。

「じゃあ、後ろに回りましょうか。そうすれば平気でしよう？」

奈緒は小さく頷き、男に導かれるままベッドの縁に座らされた。

背後から抱きすくめられ、温かな掌に胸を包まれる。

乳首を指先で転がされ、心臓が速く脈打ち、頬が熱を帯びていく。

さらにもう一方の手が下腹部へと滑り込み、オイルを足して濡れた指先が柔らかな秘部に触れた。

「今日はいっぱい甘えてくださいね」

耳元に落ちた囁きと同時に指が敏感なクリトリスを捉え、円を描くようにゆっくり撫で始める。

「ひやつ……！ あっ……ああ……！」

今まで自分で触れたこともない場所。

そこを的確に、何度も擦られるたび、膝の力が抜けて脚が勝手に開いていく。

背筋がぴんと反り返り、息が詰まりそうになる。

「あなたはここが、とても弱いんですね……」



低い声で囁かれ、撫でる動きが速くなる。

くちゅ、くちゅ、ぬちゅ……。

オイルと溢れた蜜が混じり、いやらしい水音が室内に広がる。

「やつ……やだ……っ、なんか……変っ……！」

奈緒は首を横に振るが、指先から伝わる快感が止まらない。

熱が下腹からせり上がり、喉の奥から知らない声が漏れる。

「こわい……っ、あっ……あぁっ、な、何か……来ちゃう……！」

怯えと快楽に震えながら訴える奈緒の耳元に、男は静かに囁いた。

「大丈夫ですよ。何も考えずに、僕に体を預けてください」

「だ、だめ……あぁっ……来る、来ちゃう……っ！」

奈緒は必死に声を押し殺そうとするが腰は勝手に跳ね、ガクガクと